

神戸映画資料館 製作作品 短編映画 企画書

マニュアル通りに生きてきた男と、真面目である事に疑いを持たなかった女の新しい選択。

『ペDESTリアンデッキの対話（仮）』

ペDESTリアンデッキ...都市の駅前などにある複合施設などに直結する巨大歩道橋

監督・脚本：唐津正樹

<企画概要>

神戸映画資料館は、貴重かつ膨大な映画フィルム、書籍、ポスターなどのコレクションを主に活用し、映画の面白さ、真の多様性を体験できる場を提供することを目指して2007年3月に開館した民間のフィルム・アーカイヴであり、定期的に上映会を開いている。

2008年からは神戸映画ワークショップを毎夏開講。実践的な映画・映像づくりを学ぶ場を作り、未来の映像文化の担い手を育成することを目的とする。このワークショップから生まれたネットワークを生かし、2010年12月、地元・新長田に若手監督の佐藤央を迎え、『MISSING』の撮影を行い、神戸映画資料館の製作第1作として完成させた。

今回の『ペDESTリアンデッキの対話（仮）』製作はその第2弾で、前回に引き続き地元の協力と、神戸芸術工科大学との連携に大きく支えられ、実現の運びとなる。

スタッフ連絡先

監督・脚本：唐津正樹(090-9986-1652/posconch@yahoo.co.jp)

助監督：大岸智博(080-3816-1452/azurefox13@yahoo.co.jp)

神戸映画資料館

Tel:078-754-8039(田中)

神戸市長田区腕塚町5丁目5番1アスタくにづか1番館北棟2F 201

01.企画意図

同じ場所、同じ時間を共有しても各々の人たちが実感している「思い」は全く別です。現代において情報の多様化から、もはや「同じ年代を生きる」という共同意識は同世代と言えど失われつつあります。同時に各々が各々の経験や考えのみをアイデンティティとして掲げることによって時代は成り立っているとも考えます。そういう共同意識の無い状態で「人間関係」や「情報共有」を強いられる若い世代に憐憫の目を向けつつ俯瞰して描きたいと考えます。

本作品は取り立てて目立った人生を送ってこなかった女性が「自分の店」を持ちたいと願うことから始まり、いくつかの出会いや選択を強いられますが、その行動と発言は通常の道徳観念とは少しズレているように思われます。しかしながら、そのズレと彼女が感じている実感は必ずしも間違っただけのものではないと考えます。前向きに「自分の店」を持つとした彼女や、周りを取り巻く人々を通じて、登場人物たちが人生の選択をする事は、あくまで各々の「正当性」の上に成り立っているはずだという思いで本作品の企画意図と致します。

02.制作体制

制作年度：2011年 / 分数：30～40分 / フォーマット：HD

制作：神戸映画資料館

協力：神戸芸術工科大学 映像表現学科、JIAMS、KyotoDU

監督・脚本：唐津正樹 / 撮影・照明：岡山佳弘 / 助監督：大岸智博

録音：中島雄介(JIAMS) / 美術：塩川節子 / 制作：安川有果 ほか

03.制作スケジュール

○撮影日程： 2011年9月6日～16日（内6日程度、平日中心）

○ロケーション予定地： 神戸・新長田近辺

○撮影人員： 10人程度

04.登場人物

千田陽子(33歳・女)：コールセンター勤務。

イメージ：高島礼子、羽田美智子

奥村斗真(26歳・男)：不動産勤務。

イメージ：向井理、加瀬亮

井上(55歳・男)：振興会理事長

イメージ：西田敏行、谷啓

秋本(24歳・女)：陽子の同僚、コールセンター勤務。

イメージ：佐々木希、南明奈

05.あらすじ

他人に自慢できるような華やかな職業にもつかず、30歳を過ぎるまで質素で儉約な人生を送ってきた千田陽子は、年に数回しか電話のないIP端末のサポートセンターでバイトをしていた。ある日、現在までにバイトとパートで貯蓄した400万円余りの金を使い、同社敷地内の空テナントに「自分の店」を持ちたいと思い立つ。職場近くにある不動産屋に勤める奥村(26)に頼み、テナントの入居契約を取り付けたが、ただ広いだけの空テナントを見た千田は、想像のみで決意した出店願望に途方もない現実を見る。一方、奥村は若い時分から世話を焼いてもらった振興会の井上(55)に自身を認めてもらうため、不動産業の傍ら本来は自分の仕事ではないテナントの出店成績向上への助勢を率先して行っていた。今回の千田の出店への斡旋も井上への追従目的でもあった。

出店申請後、千田のテナントの営業利益が出てないことを不思議に思った奥村はテナントに出向くと以前と変わらない空テナントの中で、千田が掃除をしている。何から始めていいかわからないと言う千田に奥村は、地元にある古い喫茶店の店主にアドバイスをもらおうと提案する。

地元の喫茶店店主に出店までの経緯やテーブルの思い出などを聞くうちに、千田は店内にあるテーブル一式を売ってくれと店主に頼み込む。亭主は動揺するが、千田の熱意に負けてテーブル一式を受け渡す。乗り気ではないながらも千田に付き合う奥村は、井上から紹介を受けた公民館で開催予定の「飲食店開業セミナー」を千田に紹介する。開業セミナーに赴いた千田だが、会場で開かれていたのは地元の囲碁教室だった。ロビーで休憩中のスーツの男に事情を話すと、同じような境遇でここに座っていると話す男。

奥村がテナント前を通ると千田は見知らぬ老人をテナント内に招き入れ、先日喫茶店主の話していた店主自身の思い出話を自分の事のように老人に話していた。奥村は呆れ千田に説教をするもセミナーの事で逆に言い負かされる。奥村はネットでセミナーの事後報告を見るが、千田はセミナーには参加できなかったと言い張る。(セミナーは実際に開かれていたが、参加者数がゼロ人だったため、囲碁教室に会場を譲ったという経緯、ロビーにいた男は開業セミナー主催者の一人)

そんな折、同じ職場の秋本(24)が転職の為、退社することになる。同じ環境で生真面目に働いていた自分は夢も実現できず、あまり仕事意欲もなかった秋本が密かに転職情報を集めていた事に驚く千田。井上の手前なんとか千田に出店して欲しい奥村は千田を居酒屋へ誘い以前と同様店主に話を聞こうとするが千田はそそくさと店を出て行く。奥村はペデストリアンデッキ上で再度千田を説得するが、出店を勧める以外の提案をなぜしなかったのかと切り出す千田。セミナー会場で出会った男に貰った名刺を頼りに一度男を訪ねてみるといい、その場を去る。残された奥村はなぜ自分が千田の為に店の斡旋をしたのか疑問に思い千田とのやりとりを振り返り始める。

06.スタッフ紹介

監督・脚本：唐津正樹

1979年京都生まれ。大阪電気通信大学 在学時に大森一樹監督(『TRY』『ゴジラ対ビオランテ』)の研究室で映画を学ぶ。卒業後、インターネットTV会社勤務、一年間で40本近くの映像を制作&配信。神戸ビエンナーレ(2007/2009年)やハーバーランド Familio 内イベントにおいて過去に映像制作&記録を担当。また新長田 神戸映画資料館で2008年より4度にわたるワークショップにおいて講師を務める。現在は京都にある KyotoDU においてパナソニック映像機器のコーディネイト業務に従事。第1回 CO2 助成作品『赤い束縛』(2005年)、LxFilmes 短篇オムニバス企画『包む』(2008年)など。

撮影・照明：岡山佳弘

1987年兵庫県生まれ。神戸芸術工科大学にて映画監督・石井岳龍(旧名・石井聰互)に師事する。卒業後、同大学勤務、映像音響機器の保守業務や撮影機材の指導をする傍ら映画やPVなどの撮影を行う。2010年からは神戸映画資料館によるワークショップや映画製作にスタッフとして参加。

助監督：大岸智博

1987年神戸生まれ。高校在学時に映像作品を作ったことで映像に興味を湧き、神戸芸術工科大学に入学。石井岳龍(聰互)の元で映画を学ぶ。在学中に自主映画の現場を数多く経験し、自分でも監督し作品を制作した。卒業後、山下敦弘監督『My Back Page』製作進行応援や、石井岳龍(聰互)監督『生きてるものはいないのか』演出部チーフ、佐藤央監督『ミッシング』助監督として活動。その傍ら、オオギシトモヒロ名義で映像作家として、神戸長田 CM フェスティバル CM 制作や梅田 Hands theater 映像制作など誠意活動中。